

02. 国立国際美術館



元々は大阪万国博覧会の会場に作ったのが、移転してきたもの。

国立国際美術館は建物だけあってコレクション無しから始まった美術館で、隣の大阪中之島美術館はコレクションのみ先にあって建物が無かった美術館で対症的な印象を持った。

アート作品になろうとする建築と存在を都市に馴染ませようとした建築で、隣接する同じ美術館という用途だが、設計アプローチが大きく異なり、ミスマッチなファサードが連なるランドスケープとしては一体感があり今後の発展性を感じられた。

内部空間は光が降り注ぐホールと自然光が不要な展示空間で分かれており、展示空間は用途的にも自然光は不要なので、地下に埋もれている納得感はあったが、地下に埋める必要性はあまり感じられなかった。

コレクション展は、「遠い場所/近い場所」が開催されており、コロナ禍による制限を活かした作品や、東欧からロシアに関連する作家、沖縄出身の作家の戦争を現代表現した映像作品等が展示されていた。

少し一般受けはされない様な作品と感じられた。

嶋川 真登